

未来を  
懸命に志す  
県民インタビュー

「連載」

# 山梨 県人

## ある女性との出会い

ヴァンフォーレの事務所には戦歴の  
数々の思い出の品が飾られていた



「突然でした。聞けば、いじめられた過去があり、家に閉じこもっている女性がいる。その人はサッカーが大好きだからヴァンフォーレで社会とつながる活動をさせてあげられないかというお話でした」

そして紹介されたのが、白鳥恵美さんだった。白鳥さんには、早速チラシの封入作業や、試合前の準備などを手伝ってもらった。すると、日を追うごとに白鳥さんが元気になっていくのが分かった。その頃の気持ちを、白鳥さんはこう話す。

「1997」



不登校の子たちの居場所づくりに奮闘する井尻さん

# サッカー スタジアムを みんなの居場所に

人は、いつもきっかけを探しているのかもしれない。未来に向け懸命に生きる県民を紹介する連載「山梨県人の3回目の舞台は、サッカースタジアム。そこには、山梨県の不登校問題の解消を目指す女性がいる。なぜ、この場所なのか。彼女の取り組みから、社会問題解決のヒントが見えてくる。」

### HISTORY

1974  
甲府市生まれ

1997  
早稲田大学卒業。その後、  
出版社、編集プロダクション、  
広告代理店で勤務

2000  
ヴァンフォーレ山梨  
スポーツクラブに入社

2016  
不登校の子たちへの支援を始める

2024  
「やまなし女性Miraiクエスト」で  
不登校支援の事業化検討を開始。

「ここにいる人は誰も、私の過去について聞かないんです。話題に上るのは『好きな選手は？』などサッカーのことばかり。試合観戦中も、チームが得点したらハイタッチをしてくれた。『気持ち悪い』『触らないで』と避けられた過去がある私にとって、自分の居場所ができたのが、心地よくて」

わたったことがありませんでした。白鳥さんをきっかけに、本人やご家族の思い、それを見守る先生や周囲の環境などを知ったんです」

## 人の「あなたかさ」を知ってほしいから

井尻さんが生まれたのは、1974年の第二次ベビーブームの最中。入学した早稲田大学ではスポーツ

新聞部に所属し、取材に奔走した。卒業後も、こうした仕事に就くものだと思っていた。しかし、井尻さんを就職氷河期の波が飲み込んだ。友人の中でも、男性はテレビ局や出版社等のみなが憧れる企業にほとんど就職を決めているのに、女性には、なかなかうまくいかなかった。なんとか掴んだのは、出版社の契約社員だった。その後、編集プロダクション、広告代理店と渡り歩いたが、期限付きの雇用だった。そんな井尻さんを正社員で受け入れてくれたのは、ヴァンフォーレだった。

決めた。「不登校の解消はもちろん、自分に自信をつけるためにも、この企画を通したい！そう思って挑みました」

2022年10月16日、第102回天皇杯で、J2のヴァンフォーレがJ1のサンフレッチェ広島を破り、初優勝を飾った。その瞬間、たくさんのサポーターが互いに手を取り、抱き合った。

天皇杯優勝のメダルを手に取る白鳥さん(左)と井尻さん



ヴァンフォーレのマスコットをあしらった水引。通信制高校で手芸の講師を務める白鳥さんが制作した(画像は白鳥さん提供)

「いつか、恩返しがしたいと思っていました」

「ふれあえるって、温かい。知らない人同士でも、同じものを見て、楽しんだり、感情を共有したりするって素敵なことなんです。配布するチケットが、そんな喜びを知ってもらえる『未来への切符』になれば嬉しいです」(井尻さん)